

特集にあたって

東京慈恵会医科大学脳神経外科 谷

諭

今から 25 年近く前の話ですが、St. Louis で、spine surgery のトレーニングの一環として、当時出たばかりと思われる某社のケージを用いた PLIF が紹介されました。そのケージを手に取り、「これを椎間スペースに入れちゃうのか……」とちょっと戸惑いながら挿入したことを思い出します。当時、少なくとも日本の多くの神経外科医（整形外科医も）は手に取ったことがなかったものかと思います。入れるのは少々気を使うけれど、これまでよりも強力な初期固定が得られることは間違いないことは理解できました。しかし、その講義の最中に何回となく発せられたメッセージは、“bone is gold standard” でした。その強力な初期固定を得るためのごついケージを眺めているとき、そこに至るまでの PLF などをはじめとする脊椎固定における骨癒合率を上げるための先達の整形外科の先生方のご苦労・アーカイブズを思い出しました。

それから日が経っても、脊椎外科の基本的エッセンスは変わることはありません。神経外科医の僕ではありますが、ここで言いたいことは、決して fusion surgery の勧めということではなく、骨格系の再建を熟知せず脊椎手術を行うことは望ましいことではないということです。そのような意図から、あらためて総論的に脊椎外科における骨癒合の基礎と臨床という話題を企画した次第です。

基礎的なパートとして、前田和洋先生に「骨代謝の基礎」、中島 新先生に「骨折の治癒過程」を最新の知見も含めまして紹介してもらいました。臨床に直結する問題である「自家骨移植の運命」と「ドナーサイトの問題」に関して、豊富な臨床経験をおもちの伊藤全哉・大川章裕両先生にご教示いただきました。そして、将来的な問題にアクセントを置いていただき、蜂谷裕道先生に「自家骨以外の材料」、曾雌 茂先生に「人工骨の現状」、海渡貴司先生に「骨の再生医療の現状と将来」を解説していただきました。どの論文も古くて新しいような諸問題を最新の情報も取り入れながら解説してくださっています。

本ジャーナルにおきましても、このような特集はこれまでなかったようでして、多くの神経外科医のみならず整形外科医にとっても参考になる骨癒合に関する総論的解説書になったのではと思います。脊椎手術において implant ありきの instrumentation surgery がもてはやされて時間も経ち、現場では、以前より骨癒合への配慮がなおざりにされる傾向が危惧される中、読者の先生方にあらためて骨癒合の大切さを確認していただくことで、本特集が日常臨床に役立つことを祈っております。

本誌の編集会議において、本年度から編集委員長に就任された徳橋泰明先生より「谷先生、自分が知りたいことを編集のお題目にしていない？」と鋭く指摘されましたが、僕のみではなく、多くの脊椎脊髄外科医があらためて確認しておきたい基本事項ではと勝手に思い込み、特集を組ませていただいたことをお許しください。最後になりますが、本特集の企画・編集にあたっては、多くの編集委員の先生からご助言などいただいたことに、深謝いたします。